

田中さんへ送る言葉

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7392972>

出版情報 : 言語文化論究. 55, pp.117-118, 2025-10-29. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



田中さんへ送る言葉

江 口 巧

田中先生ご逝去の報を受けたのは、今年3月中旬、大津院長からのメールによるものでした。あまりに突然のことで、言葉ありませんでした。心の中でどう整理をつけてよいものかわからず、時間だけが過ぎていったのを覚えています。あれから約4か月の月日が流れ、以前田中先生がおられた頃のような平穏な日々に戻りつつありますが、今はそのような現実をかえって辛く受け止めています。

田中先生は私が九州大学に着任した1年後の平成3年春に、六本松キャンパスにあった当時の言語文化部に着任されました。当時から田中先生とは親しい同僚の一人として接してきましたので、以降は田中さんと呼ばせていただきます。田中さんとはすぐに打ち解けて、学内で姿を見かけると、よく世間話やたわいもない話をしました。そのような時の田中さんはいつも物腰柔らかく、にこやかな表情で私に接してくれました。もう30年ほども前になるでしょうか。田中さんがサバティカルでイギリスのマンチェスター大学に在外研究に行かれた時、当時は今のように電子メールもありませんでしたので、一月ごとに九大の現状と田中さんの英国での生活の様子をお互い手紙でやり取りしたのを覚えています。仕事で共に箱崎地区に出かけた際には、冬の寒さが緩み始めた時期に、家々の庭先に梅の花がほころぶ街の中を歩きながら、一緒に昼食に出かけたことが懐かしく思い出されます。

英語科では今でこそ若い教員がたくさん着任していますが、以前は私たちの世代以降若い教員を補充しない時代が長く続き、40、50代であった私たちがいつまでも英語科の「若手」と呼ばれ、教科書や辞書編集等のいろいろな仕事が私たちに降りかかっていました。そのような中、田中さんと苦笑いをしながらともに任された仕事をこなしていました。いつも丁寧に着実に仕事をこなす田中さんでしたが、ある意味性格は学者肌の所があり、また教育に関しては厳しいところもありました。自分が担当するクラスにはこのようなけしからん学生がいるとよくぼやきを聞くこともありましたが、それだけ教育に熱心に打ち込んでおられたからこそのことだと思います。しかし、そのなつかしいぼやき声を聞くことも今はありません。

田中さんが亡くなられ、その後ご家族の方とお会いする機会があった時に、昨年生まれたお孫さんを抱いて嬉しそうになまざしで見つめる田中さんの写真を見せていただきました。おそらく、これからの成長を楽しみにしておられただろうと思うと胸が痛みます。私も来年春には田中さんとともに定年となり、これまでのお互いの労をねぎらって九大の職を退くつもりでしたが、それも叶わぬこととなりました。このようになることがわかっていたら、もっと田中さんといろいろ話をしておきたかった、またもっといろいろ話を聞いておいてあげればよかったと悔やまれます。もはや旅立ってしまった田中さんには、これまで英語科、言文で積み上げてこられた貢献と功績に対し、

また個人としては長年にわたるかけがえのない親交に対する感謝の気持ちを込めて送ります。田中さん、ありがとう。今は旅の途中で、好きだった歴史言語学の書物を紐どいて眺めておられることでしょうか。どうか、これからも安らかな旅を続けられることをお祈りしています。